
孫吳ルート

眼鏡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

孫興ルート

【Zマーク】

N1681BA

【作者名】

眼鏡

【あらすじ】

冥琳と雪蓮の幸福。

太史慈と孫瑜の友情かな。

この世界に生まれ変わって数週間ほど、今日も良い天氣だ。

俺を産んでくれた母上殿は黒髪ボーネで色白美人だ。とても優しい、ただ後年この考えは覆される。そんな母上殿に色々とお世話になり、羞恥プレイにも幾分か慣れた。

最初は訳が分からなかつたが考える時間は山程ある、と言つか今は考える事しか出来ない、そして身動き出来ない事は想像以上に不便だ。

前世の記憶と知識は、朧げに、何と無く、曖昧に、覚えている。多く考える事は何故転生したか、運が良いのか悪いのか偶然か運命か、とりあえず哲学つて難しい。

光陰矢の如し、十二になつた。武術弓術剣術氣など色々な事を仙人みたい爺から学んでいる。この爺はド偉く強い、いつもボコボコにされて修業が終わる。

漢文は少し違和感があつたが、直ぐに読めるようになつた。算術は楽々出来る、多分だが前世で理系だつたんだろう。

そして解つた事が一つある、最初は別世界だと考えていたが違つたらしい、歴史は苦手だが孫堅とか黃巾とか聞けば流石に此処が三国志の世界だと覺つた。ただ三国志を詳しく知らないので、

大きな戦や有名武将しか分からない。

後は優しい義父が出来た、母上殿にはもつたない程の人物だ。

またまた光陰矢の如し、十七になり、爺にも勝ち越す事が出来るようになつた。母上殿や義父から学問を多く学んだ。そして二年前に義弟が出来たが、これがトロけるように可愛くてプーピーだ。

ちなみに俺の名は、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ。

うららかな扈下がり俺は母上殿に呼び出されて、聞いた第一声が『お前を暇だろ、だから上奏文を持つての青州の使者をどうにかしてこい』である。

もう少し解りやすく最初から説明してくれと母上にお願いした。簡単に言うと『青州（敵）と東萊郡（俺達）の間で訴訟になり上奏文を先に報告した方が勝ち』らしい、で青州の奴らの邪魔もしくは上奏文をどうにかしろと言つ。あの糞ば：失礼、母上が言うには子が親の仕事を手伝うのは当たり前なんだそうで、まあ俺は面白そうだから良いかなと思い馬を走らせて洛陽に向かった。

そして上奏文の検閲所に到着してみると、そこには青州の使者が既に居て順番を待っている所だつた。あまり良い方法が思いつかんな、まあ、なるようになるかと思いながら青州の役人に声をかけた。

「上奏文を出す前に間違いが無いか確認をするので見せてください

「わかりました、お願ひします」

悪いな、と心で謝り一気に上奏文を破り捨てた、そん時の青州役人達の顔はボケーンとしていて不覚にも少し笑いそうになつた。

「なつ、なんて事をするんだあ」

「まあまあ、落ち着けよ。俺もアンタ達もこのままでは処罰される、だから一緒に逃げようやあ」

そして俺達は遼東郡へ逃げ出した。

遼東郡に到着して元青州役人達と別れ告げて、これから的事を考えた。上奏文を破いたし青州の人達には怨まれるだろうな、もう青州には行けない。

あの母は心配するだけ無駄だが、ただ心優しい義父と可愛い義弟は心配だ。

とつぶん帰れそうにないから仕事でも探すかな。

まあ、とりあえず小籠包でも食つかな。

金石之交（前書き）

金石之交

あんせきのまじわり

意味

いつまでも変わらない友情

久しぶりに家に帰るかなあ、半年たつたし大丈夫だらう。そんな感じで東萊郡を田指し、遼東郡から出発した。

晴れ渡る空、生い茂る緑、そして馬鹿で間抜けな賊共。賊Aや賊Bが騒いでいる、まったく五月蠅い奴らだ。弱い奴には興味無いんだよなあ、疲れるだけだから。

「今すぐ決めてくれ、死ぬか逃げるか、どっちが良い」「俺が、やつ言ひと。

賊Eの掛け声の元。

「馬鹿かお前、野郎共やつちまえ」馬鹿な賊共は俺に襲い掛かつて来た、助かる命を無駄にするなんて本当に救えない。

五人目の賊を切り捨てて一息ついた時に、丁寧な口調で声が聞こえてきた。

「手助け、いりませんでしたね」

振り返つて見ると赤毛赤目で田に焼けた爽やかな笑顔の好青年が、そこには居た。

「都昌にある書や竹簡を読みたくて、向かっている所です
成る程な、今も手に本を持つてるしな。

「へえ、書を読む為に都昌まで行くのか、途中の東萊郡に俺の家があつて竹簡なら結構あるし書も少しならあるけど、来てみるか」

眼を輝かせ即答で。

「それは是非とも行きたいですね、どんな書や竹簡があるんですか」
本に関する食いつきは、ハンパなかつた。
そんな感じで書物の話をしながら日が沈んだ。

真つ暗闇で、たき火の炎しかない山の中、空を見上げると木々の間から馬鹿みたいに綺麗な星が輝いているのが見えた。

「星が好きなのですか」

阿呆みたいにずっと見ていたからか、そんな事を聞かれた。

「好きか嫌いかで言えば、好きなのかねえ、でも正直に言えばこれといって好きなモノが無いな、そうゆうモノあるか」
俺がそう聞くと、少し微笑んで、優しく、強く、はつきりと、答えた。

「ありますよ、どんな事をしても欲しい者、たつた一つだけ欲しい者が」

俺は少しばかり面食らつたと思つ、さつきまでの優しいノンビリした眼では無く、熱く燃えるような瞳だった。

「女か」

俺が聞くと、じつと俺の目を見て答えた。

「はい、そうですよ」

真つ直ぐな男だなあ。

「アンタ程の男にそこまで想われていたら落ちない女なんていないだろ」

困ったような苦笑いをして、少しためらつてから話しだした。

「弟のように思われているんです、それに…、従姉妹なんですよ…。
軽蔑しますか」

この時代はイト「婚つて駄目なんだっけ、少し逡巡してから。」軽蔑しねえよ。まあ、良いんじゃないか、確か武帝も従姉妹と結婚しただろ」

そう言うと、少し驚いたような顔をした後、真剣な表情でゆっくりと話しだした。

「でも建前上は駄目でしょ、それに外聞も悪いのは事実です。でも絶対に手に入れます、絶対に」

最後は爛々と瞳を輝かせて、そう言い切った。

自然と心から言葉が出てきた。「面白い男だな」と。

俺が、そう言うと直ぐさま切り返してきて。

「そうですか、貴方も十分に面白い男だと想いますが。それと名乗り忘れていました、姓は孫、名は瑜、字は仲異、真名は牙連と申します」

流れる石の如く一気にさらりと言い切った。俺はその時、相当な間抜け面をしていたと思つ。

この世界では、本人の許しもなく真名を読んだら殺されても文句を言えない。それぐらい大事なモノのはずなのに。

そして、またまた素直に言葉が出てきました。

「何故、真名まで許しててくれたんだ」

にっこりと笑つて、

「勘です」

自信満々に牙連は言い切つた。

ひとしきり笑つてから。

「俺も名乗らう、姓は太史、名は慈、字は子義、真名は誠だ」

牙連は、びっくりした顔をして、ナチュラルに俺の真名を呼びながら話出した。

「誠が、あの太史慈子義だつたんですか、凄く有名になつてますよ。堂々と検閲所に乗り込んで役人全員を倒し、瞬く間に上奏文を破り捨て消えて行つたつて」

へえ～、そんな噂になつてたのか、知らなかつたな。

まあ、知らないオッサンやオバサン、爺さん婆さんが声を掛けてきたり食べ物をくれたが、そうゆう事だつたのか。

なんだかんだで話しあがいて遅くなり、もう寝る事にした。

おやすみなさい。

帰路感概（前書き）

適当に繋げた言葉です。

帰路感慨

あれからは何事も無く、昼頃には東莱郡に着いた。久しぶりに我が家を見ると、なんだか感慨深いなあ。

家に帰ると誰もいなかつた…、とりあえず牙連を書斎に案内して居間に戻つて茶をいれないと、

「ただいま、誰か居るか」

そんな声を掛けながら母上殿が家に入つて來た。

俺は納得出来ない気持ちで、渋々ながら出迎えの言葉を口にした。

「お帰り」

そして、この切り返しだ。

「ん、調度いい時に帰つてきたな。お前さ都昌に孔融という人物が居るからよ、その人が黄巾賊に襲われてるんだ。助けに行ってこい」

半年ぶりに帰つてきた息子に、これだよ。

「なんで…、つか詳しく述べお願いします、わからぬいか」

この愚息は、とため息をこぼして話し始めた。

「若い時に助けてもらつてな、その時の恩がある。知つての通り私は右足が無い、戦は少し厳しい。だから息子であるお前が行け、出来るだろ。」

母上殿は若い時に戦で怪我をして右足をなくした。ちなみに、その時の医者が俺の父親で、俺が三つの頃に亡くなつた。

義父と義弟が帰つてきたので、俺は直ぐに義弟と遊ぶ事を決めた。

久しぶりに見る義弟はやん」となく可愛いく、とても癒されながら戯れた。幸福だ。

義弟と遊び終わり、俺は書斎に向かった。そこには、ほぼ最初と変わらない姿のまま牙連が居て、違っていたのは本だけだった。

「どうだ良い書はあつたか」

牙連は眼を輝かして。

「医学書が多いね。他にも見た事ない書があつて凄く面白いよ。」「死んだ父親が医者だつたからな。まあ、それは良かつた」

とつあえず俺は母上殿と話した内容を解りやすく牙連に話した。
「と言う事なんだ。都昌には黄巾賊が居るから今は行かない方がいい。俺は明日にでも出発するが、牙連は好きなだけ、ゆっくりしていってくれ。」

牙連は首を振つて、

「僕も行くよ。元々、都昌に行く予定だつたからね。」

笑顔で、そう言つた。

「そつか、ありがとう。なら手合わせしないか」

強い事は分かるが、力量を出来るだけ知つておいた方がいいだろう。命を預ける事もあるだろうしな。

牙連も頷いてくれた。

キンッ、ガンッ、ガキンッ、俺達は剣劇の音を鳴らしながら戦つて、いた。牙連は想像以上に強い、苛烈で豪快で鮮やかだった。そして俺は闘いが楽しいと感じていた、だんだんボルテージが上がりてきていて本気を出してやろうかと思った、調度そんな時に牙連は距離をとつて。

「これぐらいで、いいでしょ。これ以上やると大変な事になるので、終わりです」

確かに、とも思いながら俺は残念でしょうがなかつた。

ふう、少し頭でも冷やすか。

「大変な事になる」その時の俺は、その言葉の意味を勘違いしていた。

東奔西走（前書き）

コノ盃ヲ受ケテクレ
ドウゾナミナミ灌ガセテオクレ
花ニ嵐ノタトエモアルゾ
「サヨナラ」ダケガ人生ダ。

井伏鱒二「勧酒」

（「厄除け詩集」筑摩書房刊）

東萊郡を朝早くに出発して、日が沈む前には都昌近郊に着いた。

都昌、近くの茂みの中に俺達は隠れていた。

「黄巾賊が、なかなか多いな。入り込むのが厳しいねえ」

「でも、まだ完全には囮まれていないから、夜を待つて都昌に入ればいいよ。それにしても誠の母上は、少し無茶を言つね。」

「素直に言つてくれていいで、無茶苦茶だつて。俺は、もう慣れたけどな」

自分で言つて悲しくなつた。

夜の帳が降りて、数時間後。

「さて、そろそろ行くかあ」「うん、行こつか

暗闇の中を移動して、都昌と黄巾、両方に気付かれる事なく、すんなりと城壁の下まで、たどり着いた。

俺は腰に差していた蛇腹刀を抜いた。

「それで、任せろつて言つてたけど、どうするんだい」

「まあ、見てるよ」

この蛇腹刀、母上殿が言つには家に代々伝わる刀らしい、始めて見た時には「蛇尾丸」だ、と分からぬ單語が浮かんできたが、あまり気にしていない。

この蛇腹刀を俺は使いこなせていない、操る事が難しく、いつもは「突起の付いた刀」として使つてている。

大きく後ろに振りかぶり、俺は祈りながら刃を伸ばした。運よく良い具合に引っ掛けたようで、安心した。繋ぎ田と峰の部分を掴み足場にして、城壁を登つて行つた。

「あの刀、本当に伸びるんだね。今度、詳しく見せてよ。」
繩に縛られ武器を取り上げられて、こんな状況で呑気だなあ、と俺は感心していた。

何故こうなったかと言つと、牙連が城壁を登り終える所で調度、見回りの兵士が来て、俺達はおとなしく捕まる事にした。

幸いに、あの元青州役人が居て本人だと証明してくれて、直ぐに繩を解いて武器を返してくれた。

ちなみに孔融のオッサンは、あの孔子の子孫らしい。

それで孔融のオッサンに作戦とか有るのかと聞いてみたが援軍が来るまで籠城すると言つ。

ただ、どこから援軍が来るのか曖昧で本当に来るか心配だ。

今ならば、まだ黄巾賊を潰せると思つが打つて出る気は無いようだし、兵を貸してくれれば俺がやるが、まず貸してくれないだろう。黄巾賊も攻めあぐんでいるが、このままでは、じり貧になつて終わる。

「早くどうにかしないと、黄巾賊が集まつてきて完全に包囲されるね」

牙連も俺と同じ考え方らしい。

どうしたもんかと二人で考えていたが、刻々と夜が更けていった。

あれから四日後、黄巾賊に激しく攻められている。完全に都昌は包囲され、都昌の兵力だけでは到底覆せないようになっていた。

そして孔融のオッサンは、ようやく重たい腰をあげて、平原に居る劉備に援軍要請の使者を出す事にしたようだ。

俺は胸中で思い切り叫んでいた「今更かよ」「つか使者を出してなかつたのか」

いや気付かないでいた俺が悪いな。すんだ事は、しょうがない。冷静になつて落ち着こう。

完璧に包囲されている中、わざわざ使者になろうとする奴がいるわけもなく、他の奴らに任せるのは不安過ぎて俺は自分で引き受ける事にした。

「真っ直ぐ突っ込んでは行かないよね」

牙連よ、お前は俺を殺したいのか。

「死ぬわ、なんで牙連の中で俺は猪突猛進な人になつてんだよ、一応は考えがある」

「誠が知り合いに似ていてね。考えがあるなら良かつた、僕も手伝うよ」

とりあえず牙連に作戦を話して、意見を聞いてみた。

翌日。

作戦一日目。

俺は「矢を持って、兵士三人には的を持つてもらい、朝早くに門を開け城外に出た。

黄巾賊は、それを見て攻めて来ようとしたが。

城門の前で、さつさと三射を射つて直ぐに戻った。

作戦一日目。

昨日と同じく、三射を射つて直ぐに戻る。黄巾賊の中には、少し動く者もいるが、またかと興味が薄くなっている。

作戦二日目。

黄巾賊は、ほとんど興味を示していないようだ。牙連が三射を射つたの確認して、俺は馬を一気に走らせて一騎で城門から飛び出した。

黄巾賊は、最初ポカーンとしていたが慌て追いかけてきた。追つて来た賊三人を三射して仕留めたら、誰も追つてこなくなつた。意外と上手く行くもんだな。

「劉備玄徳殿、お初にお目にかかる。我が名は、太史慈子義。都昌が黄巾賊に襲われている。出来れば今直ぐに三千ほど兵を貸して頂きたい。」

自分で自分の冷静さを褒めてやりたい、だつて劉備、カンウ、チヨウヒ、がなんだよ。

びっくりした、びっくりし過ぎて馬鹿みたいに丁寧口調で喋つてしまつた。

男が一人居たが、なんか違和感がある名前だった。

少し相談をしてから、快く貸してくれた。武将一人も着いてくれるようだ。

三千の兵を引き連れて平原を出発し都昌を目指した。

黄巾賊は、無駄に足搔く事もなく直ぐさま逃げ出した。挾撃されし、分が悪いからな。
つまりんけど、見事な判断だ。

それから何故か劉備軍の一刀と言つ男に勧誘されたが断つた。誰かに仕えるなんて考えた事がなかつた。

少し考え方をしていたら、向こいつから牙連が歩いて來た。

「お帰り、一騎駆け。勇猛だつたよ」

「ただいま。ありがとよ」

これで孔融のオッサンにも恩返し出来ただろ。さつと家に帰れりなと思っていたが、そうは問屋が卸さかつた。無駄に活躍したせいか孔融のオッサンに気に入られて、宴会に付き合わせられた。少し飲み過ぎたなあ、酔いでも醒ますかあ。

城壁の階段を登ると既に牙連が月見酒をしていた。

俺達は、言葉を交わす事なく、ぼーっと夜空の月を見ていた。

その時の俺は、酒と月に酔つていたんだと思つ。ぽつりぽつりと話し始めた。転生の事、この世界の事、しばらくして話し終えて聞いてみた。

「信じるか」
「信じるよ」

そして今度は、牙連がぽつりぽつりと話し始めた。

「僕はね、誠。好きな人に害をなそうとした兄を殺したんだ。後悔はして無いと言えば嘘になるけど、やってよかつたと思つてるよ」

「軽蔑、しました」

「軽蔑、しねえよ」

それっきり、俺達は、また黙り込んだ。

一騎打ち

あれから、二年がたつた。

牙連と別れて一度家に戻り、あてもなく旅をして、久しぶりに家に戻ろうかと考えていた。

俺が飯屋を探していると、声を掛けてきた奴がいた。そいつは劉ヨウの使者で、劉ヨウが同郷のよしみで俺に会いたいと言っているらしい、確か劉ヨウは將軍の位だったかな、飯が出るだろうし、俺は会いに行く事にした。

間が悪かった。

劉ヨウに御用通りしている時に孫策軍が攻めて来た。

そして俺は劉ヨウ配下の人達に力を貸して欲しいと頼まれて、これも縁かと思い助力する事にした。

孫策伯符か「江東の麒麟」だったかな。面白くなりそうだ、いつも頑張りますか。

劉ヨウ軍は、どんどん孫策軍にやられている。そんな中で俺は、戻候をしていた。

劉ヨウ陣営の中に入人物鑑定家の許劭きょじょうと言ふ人物が居て、その許劭に俺は嫌われているらしい、で劉ヨウは許劭の目を気にして俺を使わないようだ。

俺は一度しか許劭に会った事はないんだが、ほぼ無視、噂だけで嫌われているのかね。まったく、どうしようも無いな。

そして今日も今日とて、斥候をしている。

さつそつと馬を走らせて俺達六人は、適當な所で一人組になり三方向に別れた。

目新しい物は無いか、眞面目に斥候の仕事をしていると少人数の人間が向こうから来るのが見えた。

この時の俺は相当にフラストレーションが溜まっていたんだと思つ。得に考えもせぬ、一気に駆けて先頭に居る女に刃を向けた。一合だけ切り結で直ぐに、強い、と思つた。

そして俺は「一騎打ちしないか」その女に言い放つていた。

「いきなりね、でも良いわよ」先頭に居た桃髪褐色肌の女は了承してくれたが。

「雪蓮つ、何を言つてゐる」

黒髪で眼鏡をかけた褐色肌の女は相当にお怒りのようだ。どうにか桃髪女が黒髪女を説き伏せたようだつた。

黒髪女が俺の事を睨んでゐる。

桃髪女は、待ちに待つた遠足に行ける、そんな笑顔をしながら「待たせたわね。あなた太史慈子義でしょ」と聞いてきた。

俺は「そうだけど」と答えた。

桃髪女は「やつぱりね」と、うんうんと頷いてゐる。

「黒髪黒目で三白眼の八尺もある大きな男、聞いた通りね。

私の事、聞いてない」

うーん、誰だ、わからん。

銀髪褐色肌の弓を持つた女の人が「名乗って、おらんじじゃうが」とヤジのような一声を言つてくれた。

「そりだつたわね、ついつかりしてたわ。我が名を名乗らう姓は孫、名は策、字が伯苅だ。牙連の従姉妹で江東の虎の娘よ、よろしくね」

「ポカーンだよ、ポカーンとしていたよ。理解するまでに少し時間がかかった。

確かに孫だけどさ、孫策が従姉妹だつたとは、ビうじよ一騎打ち申し込んじやつたよ、牙連に殺されるかも知れない。

そんな不安を感じとつたのか。

「大丈夫よ、一騎打ちだもの私が死んでも、あなたが死んでも、恨みつこ無しよ、でも私を殺すのは無理でしじうね」そう言つて剣を抜いた。

まあ、なるようになるか。

そんな感じで俺も刀を抜いた。数合を切り合つと楽しくなつてきて、手加減なんて言葉は何処か遠くに行つてしまつた。

お互い少しずつ傷をつくり、いつたん距離をとつた。

孫策は、頬の傷から出た血を指ですくい舐めると、すこぶる笑顔になつた。怖いわ。

しばらくして鳴り響いていた剣戟の音が止んだ。それにともない俺

達二人の動きも止まつた。俺の刀は孫策の首に、孫策の剣は俺の喉元に、動けず睨み合つていた。

そんな時に眼鏡女の声が聞こえてきた「両者互角で良いだろつ、お互い刃を引け」

孫策は距離を取り俺を指差しながら叫んだ。

「でも冥琳、こいつ牙連を男色にした変態よ、成敗しないと気がすまないわ」

ちょっと待て、なんだ、それ。

なんとか懇切丁寧に説明して、俺は誤解を解いた。

今日の所は、お互ひ引く事にして陣地に戻る事になった。

牙連の趣味がわからんな。あんな狂暴そうな女どこが良いんだ。

それはそれとして確か暗殺されるんだよな、牙連には伝えないとな。

防戦一方

あれから数日がたつた。

孫策軍は押せ押せだが、劉ヨウ軍はボロボロだ。

劉ヨウは撤退する事にしたらしい。まあ、このままじゃ全滅するだろうしな。

しかし、まさかの此処で俺を丹楊の防戦を任せるとは、本当に無茶を言つなあ。

まあ、足搔けるだけ足搔くか。

そして俺達はゲリラ戦を開始する事にした。これなら俺の少ない部下で元山賊の者が多い部隊には調度良い戦法だつた。

そんな感じで粘りながらも、徐々にでは有るが確実に戦線を押されていった。

そして、とうとう丹楊まで孫策の軍が押し寄せてきた。

いやあ、孫策軍が立ち並ぶ姿は壯觀だねえ。そて、これから、どうするかなと、そんな事を考えていたら。

牙連が一騎で出て来て、大きな声で話し始めた。

「太史慈子義殿と一騎打ちにて決着をつけたい返答はいかに」

牙連は、やつぱり面白いな。

「少しひ話をしてくれる」

仲間達に、そう言つて俺は城門から歩いて向かつた。

牙連はニッコリしながら

「誠なら絶対、来ると思つてたよ。」

「馬鹿野郎、ただ俺は一騎打ちで俺が勝つたら孫策軍は必ずするのか、とりあえず聞きに来ただけだ」

また笑いながら

「僕に一任されたからね、誠が望むままに、して良いよ。ただ誠が負けたら僕達に協力して欲しい、良いかな」

「お前さつきから笑い過ぎだ。気前が良いね、そんなに俺に勝つ自信があるのか」

真剣な表情で

「あるよ」

短く一言だけ、言い放つた。

「ならやるか

少し距離を空けて俺達は向かい合い同時に刀を抜き、構えた。行くぜ、その掛け声を発して俺は牙連に激突して行った。

数十合を切り合ひ、鍔せり合いをし、俺は飛びながら牙連の刀を避けた。

「軽業師みたいだ、ねつ」

「そうか、よつ」

切り結び、少し距離をとった。

行くぜ、心の中で呟きながら俺は蛇腹刀を伸ばした。

牙連は少しだけ驚いた顔をして直ぐに真剣な表情になつた。

やるねえ、初見で大体の奴が終わるって言つのに、よつ。

「それ、伸ばせて闘える、ようこ、なつたんだね」
牙連は、蛇腹刀を、かわしながら、そう言つた。

「人間、日々進歩するもんだろ」そう言つてやると、牙連が迫つてきて、

ゆつくり優しく話し始めた。

「誠、本気を出すよ。死なないでね」

ゾクッとした感覚の後、俺は文字通り、数メートル、吹き飛ばせられた。なんとか体勢を整えたが、その後は防戦一方だった。防ぐだけで手一杯だよ。

それでも数十合を持ちこたえた俺を褒めて欲しい。

そして俺の刀は宙をまつて、地面に音をたてて落ち、牙連の刀は俺の首横で止まっていた。

「僕の勝ち、だね」

ニッコリ笑つて聞いてきた。

「お前の勝ち、だよ」

俺は、そう言つて大地に寝転んだ。

その後、俺は仲間全員を説得して孫策軍に入る事になった。おもだつた武将や軍師と顔合わせする事になり、その後、俺の処遇を決める事になった。眼鏡女、違つた、周瑜公瑾は、俺を見て言い放つた。

「私は反対だ、孔融や劉ヨウを渡り歩いてきた男だぞ、信じられん。それに色々と問題もある、いくら牙連の友でも私は直ぐに納得は出来ない。」

これは軍師としての意見だ、と付け加えた。

孫策は短息しながら。

「わかつたわ、冥琳。子義、武器を預かるからいいわね。それで冥琳が見張りをしなさい。

子義は早く冥琳から信頼を勝ち取りなさい」

これ決定、はい終わり～と言いながら部屋を出て行つた。それに続いて武将や軍師も出て行き最後に牙連が、

「誠、冥琳にも今までの事を話せば分かつてくれるからや」

「冥琳もお手柔らかにね」

そう言つてから、扉を閉めた。

そして俺と周瑜だけになつた。

椅子に座れ、と周瑜に言われ。俺はおとなしく椅子に座つた。その後は尋問のような話し合いをして時たま、ふざけた事を言つと凄い形相で睨まれた。

そう言えば周瑜は病氣で死んだつたな、牙連も真名で呼んでいたし大切なんだろうな助けないと、そんな事を考えていたら周瑜に怒られた。

それからも、じっくりと尋問されて、とても疲れた。

キツイ女だなあ。

翌日、俺は散々と周瑜に尋問を受け「コテンコテンにされて疲れていたが、周瑜に許可をとつて牙連と話す時間を貰つた。

「昨日は大変だつたようだね」

「大変なんてもじや無いぞ。あれは、地獄だつた」

「冥琳は軍師だからね、色々と思う事があるんだよ」

それから、俺は俺が知つてゐる事を牙連に話し始めた。

俺の世界の、孫策と周瑜の事、三国志の流れ、全てを話し終えた。

「わかった、ありがとう。

雪蓮の事は僕が絶対に守るよ。冥琳、周瑜の事を…、誠に任せて良いかな」

じつと牙連が見てくるので、

「わかった、いいぜ」

おもわず了承してしまつた。

少し他愛もない事を話してから俺達は部屋に戻つた。

周瑜は見た感じ健康そうだ、ただ病気は知らない内に体を蝕んで行く事が多いけど、多分だが周瑜は体の異変に気づくだらう。ううん、直接聞くしかないかなあ、当たつて砕けるだ。じつと見ていたせいか周瑜は竹簡から顔を上げて睨んできた。

「やつから、なんだ。言いたい事があるなら言へ。」

「周瑜、お前さ顔色が悪いぞ。心配だから俺が診てやるよ」

周瑜は胡散臭そうな顔をして

「別に私は健康だ。それに、お前に診療が出来るのか」

「一応、気になるから診療したいんだよ。それに、これでも俺の夢は医者だ。小さい頃から勉強もしている。」

父の後を継ごうと思っていた、でも父が死んで俺は母に何故か言い出す事が出来なくて、それからボンヤリ生きてきた。

今まで誰にも言つた事は無かつたのに、俺は口に出していた。

周瑜は驚いた顔しながら

「良い夢だな」

そう言つて微笑んだ。

俺は、顔が赤くなつていたと思う。照れながら聞いてみた。

「馬鹿にしたり、疑つたり、しないのか」

「それこそ馬鹿にするな、これでも人を見る目はあるつもつだ、それに立派な夢だと思うがな私は」

診療を終えた。周瑜が言つた通り、俺が診ても、健康そのものだつた。ちよくちよく診療するしか無いな。

「健康だな、これからも定期的に診療して良いか」

「やつてくれるのほほり難いが、出来るのか」

「おつ、任せる」

その後、俺は一般兵を診療し馬車馬の如く働かせられ疲労困憊になつた。

そして翌日は、一般兵から聞いたのか大勢の人民が診療しにきた。もはや俺は死にそうになつた。いや死んでいた。

周瑜よ、これは「お前の策略なのか」と阿呆な事を考へる程に俺は疲れていた。

周瑜一人を診療するつもりだつたんだがなあ。

まあ、医者としての第一歩だと考へれば良いかあ。

それと見張りも解除になり、周瑜には公瑾と呼ぶ事を許された。一步前進だな。

そんな感じで数日を過ごして、ゆつくり出来るようにもなり、俺は爆睡をしていたが牙連に起こされた。

「疲れてるだろうけど、今日の軍議に出て欲しいんだ」

俺はしようがなく行く事にした。

俺は、驚きながら声を出して、もう一度、確認をした。

「本当に劉ヨウが病死したのか」

最後に見た感じでは元気そうだったのに、一体どんな病氣だつたんだ。

そんな事を考へていると雪蓮が続きを話し始めた。

雪蓮とは酒を飲みながら、真名を交換をした。

「劉ヨウ軍をどうするか。なんだけど、冥琳、良い案ある」

公瑾は軍師らしく

「一気に殲滅すべきだな」と言つていた。

俺は、お行儀よく手を挙げて

「俺は、劉ヨウの軍勢を仲間に出来るなりと思つ、説得に行つても
良いか」

配下の者達は「太史慈は裏切るに決まつてゐる」と言つて反対して
いたが、

雪蓮は「それ決定。誠に全部、任せるわ」

公瑾も得に何も言わなかつたので軍議は、お開きになつた。

俺は劉ヨウの本拠地場州牧に行く準備をしていると、公瑾がやつて
きた。

「どうしたよ。釘でも刺しにきたか、安心しろ裏切つたりしねえぞ。」

「その心配はしていない。それで劉ヨウ軍を仲間にする考え方はある
のか」

「まあ、どうにかなるだろ。あつちに着いてから考へるよ」

公瑾は溜め息を吐いて、もういい、と言つて何処かに行つてしまつ
た。

俺は丹楊を出発して、場州牧に到着した。知り合いの人達を見つけて
立つた者達を集めて欲しいと頼んだ。戸惑いながらも頷いてくれ
た。

俺は雪蓮が、どれほど凄く偉大な英雄か、少し盛つて話した。それ

で半数以上が孫策軍に士官する事になった。

後で分かつた事だが公瑾が密偵を使い俺達の良い噂を流していたらしい。

すんなり俺の仕事は終わった。公瑾にでも酒を奢るかな、と考えながら丹楊に戻った。

仕事も終わっているだろうと、夕闇が包む頃に、公瑾の部屋に向かつた。

「はいるぞ。酒、持ってきた飲まないか」 そう言ひながら近くの椅子に座った。

「まつたく、少し待つて。キリが良い所まで終わらせる」

「まだ仕事やつてたのか、いくらなんでも働き過ぎだろ」

「いつもよりは少ないんだがな」 そう言ひながら竹簡や書を片して、こちらに来た。

「それで、何か壊したか、困つた事でも、あつたのか

「なんでだよ」

「私の所に来るのは、大体そんな人間ばかりだからな」

「俺は少し呆れながら、公瑾に酒を注いだ。

「俺の自家製だ。そいつの酒より断然美味いぞ」

公瑾は確かに美味しいなと言つて「これは売れるぞ、と商売勘定をし始めた。

俺は溜め息を吐いて、公瑾の頭を両手で掴み頭突きをした。

「お前、こきなり何をするんだ」額を手で押さえ睨んでいたが、少し涙目になつていて怖くなかった。と言つより…、違う違う何を考えてんだ。

「公瑾、色々と考え過ぎだ。たまには体を休めて頭からっぽにして、のんびり過ごせ。」

「考える事は私の癖で、考え中は落ち着ける。それに軍師たる者の常田頃から考えているものだ。のんびり過ごせと言われてもな、困る」

「オーケー、了解、理解した。今度の休み俺に付き合え、良いな。これ決定、わかったか。」まくし立てて言い放つた。

「あ、ああ、わかった」

公瑾は、勢い流されながら頷いてくれた。

「まあ、とりあえず今日は帰るわ。じゃあな」

俺は、自分の部屋に戻った。

公瑾は、あれから一向に休む事なく毎日働いていた。

俺は、牙連に頼み公瑾が休めるように手伝つてもらつた。まず簡単な竹簡や書をどんどん捌いて、簡単な物を部下達に配分した。

雪蓮と祭さんには、俺の自家製酒を牙連に持たせて書や竹簡を全て片付けたら、『褒美』としてあげる事を約束した。

ちなみ祭さんとは銀髪褐色の綺麗な人だが、酒が大好きなオヤジ臭い吳の残念美人の一人だ。

後は、わりと早くに真名を許してくれた人もある。

そんなこんなで裏工作を色々として、ようやく公瑾が丸一日、休める日を確保した。

あいつ…、一人で一体どれだけ働いているんだ。

ようやくと休みの日が来た。

「それで今日は、何処に行くつもりなんだ」

当然の疑問が公瑾から出てきて、俺は自信を持つて「山だ」と、指を刺しながら叫んだ。

「そうか」

少し呆れる氣味に頷いた。

馬を一頭を引いてきた所で、公瑾が不思議そうな顔をしたので、「相乗りだ。いつも働きすぎだからなあ、今日は完璧に休んでもいい」渋々ながら頷いて、公瑾は後ろに乗った。

綺麗な青空と緑豊かな原っぱ、その真ん中に木が一本だけ立つている。

「斥候している時、たまたま見つけた場所なんだ。綺麗だろ」

「ああ、良い場所だな。これから、じうするんだ

「だらだらする」

公瑾は、少し間抜けな顔で聞いてきた。

「それだけか、他には」

俺は、うんともすんとも言わず首をすくめて見せた。

「まつたく、こんな良い女が居ると言つて、ハア」

呆れ顔で、溜め息を言葉にして発した。

俺達は原っぱに寝そべり、ぼーっと晴れ渡る空を見ていた。

「暇だな

「お前は殴りたいのか

「冗談だろ、拳を下ろせ。所で公瑾はさ、夢とかあるのか

「あるぞ。雪蓮の霸業を叶える事だ」
眼を輝かせて言い放つた。

「夢と言つより野望だな」

「同じだろ？、違うのか」

それからは、好きな物、嫌いな物、戦略や世間話など色々な話しきをした。

腹が減つたので昼飯を食べて、近くにある小川を見に行つた。

「水が、冷たいねえ」

「ああ。それに、とても水が澄んでいる」

公瑾は小川に足を浸して両足をぶらぶら動かしていた。

それが、とても綺麗で俺は見とれていた。

その時、ガサガサと茂みが動き子パンダが現れた。

「まだ、子供のようだな。」

公瑾は膝の上に子パンダを乗せて撫でていた。

「親とはぐれたのかねえ、どうしたもんか」

そんな話をして子パンダと遊んではいる森の奥から鳴き声が聞こえ、子パンダは素早い動きで駆け出して行つた。

公瑾は、少し淋しそうに微笑み森の奥を見ていた。

原っぱに戻る事にして、木に腰を掛けノンビリとしていた。そのうちに俺の体に公瑾がもたれ掛かってきた、首の横から覗いて見ると寝息をたてていた。

俺は微笑み瞼を閉じて風を感じていた。

眠つていたのか、どボンヤリ考えていた。

「おいつ、起きたか」

公瑾が覗き込んでいた。

「ああ、それにしても随分と寝てたらしい」「辺りは、すっかり日が暮れていた。

「そうだな、私も先程まで寝ていたから少し驚いた」

うんと背伸びをして俺は立ち上がつた。

「帰るか」俺は、そう言おうとして口をつぐんだ。最初は見間違いかと思つたが段々と淡い光が広がり、辺り一面を覆つて明滅していた。それは幻想的で儂くて美しかつた。

「綺麗」

公瑾は一言だけ呟いた。

その後、俺達は長い間ずっと街の光を飽きる事なく見ていた。

丹楊に戻る馬上で。

「帰るのが、こんなに遅くなるとはなあ」

「別に良こそ、とても素敵な物が見れたからな」

「それは良かった。今日は、ゆっくり休めたか

「ああ、休めたよ。それに楽しかった。今日は、ありがとう」

丹楊に到着したが昼寝し過ぎたのか眠気がまったく無かった。それで公瑾の部屋で酒でも飲もうと向かっていくと、通路の角から牙連が現れた。

「良かった、帰ってきたんだ。今日は帰らないかと思つたよ。早速で悪いけど大変な事があつたんだ」

靈帝が崩御なせれた、と牙連は言った。

戦乱の夜が明ける。

虎牢劈開（前書き）

虎牢劈開

じゆりつべきかい

虎は牢屋を切り開く

適当に言葉を繋げました。

とりあえず俺達は袁術の元に戻る事にした。
しばらくして袁昭から「悪逆非道な董卓を討伐しましょ」
と言つ感じの文が来た。

雪蓮と公瑾は、反董卓連合軍に参加する事に決めたようだ。

我らが雪蓮、曹操や劉備など、三国志の英雄が集まつていた。

雪蓮と牙連と公瑾は軍議に出ていないので、俺は数少ない男の武将
である韓当と暇つぶしをしていた。

韓当は眼鏡をかけた優男風だが、まあまあ強い部類に入る。

「お前さ、祭さんには口出ししないの」

「僕には無理ですよ。高嶺の花です。それに見ているだけで十分で
す」

「男なら、当たつて砕けろだ。」

「砕けるんですか。そう言えば誠殿には、好いている人、良いと思
う人は、いないのですか」

「うーん、得にいないが敢えて上げるなら公瑾かな」

「なるほど、あの鞭で打たれたい、と言つ事ですね」

「お前、絞め殺されたいの」

そんな馬鹿な話を適当に話していたら、雪蓮達が戻ってきた。

総代将は袁昭になり、先方は劉備軍と牙連の部隊になつた。何故かと言つと劉備軍の一刀が袁昭と揉めて、牙連は俺と別れた後に揉め事になり少々手荒な方法で解決したので、怨まれていたらしい、袁昭は子供か。

「いつか袁昭も袁術と一緒にぶつ殺すわ」と雪蓮は物騒な事を言い。公瑾は「お前なら大丈夫だと思つが、一応言つておく無茶をするな、後は兵を減らすなよ」と牙連に言つていた。

「余裕だろ」

俺は呑気に言つたが、牙連は溜め息を吐いて言葉を口にした。

「戦う事が嫌いなんだ、お茶でも飲みながら本を読み、ゆっくりノンビリ暮らしたい」

あれほど強いのに戦う事が嫌なのかと不思議に思つた。

俺が黙つていると牙連は「誠、一緒に来てくれないか、もしもの時は止めて欲しい」不安な表情で、そう言つてきた。

疑問に思つたが、とりあえず頷いておいた。ただ、この疑問は直ぐに解決される事になる。

虎牢関の前まで進軍して、予定通りに牙連が前に進んで行き、華雄にヤジを飛ばしている。

華雄は孫堅に負けていて、甥の僕が言えば出て来るかも、と牙連が

言ったので、いつみづ事になつてこる。

酷い事を言ひなあ、と俺でも思つ程、凄い言葉を口にしていた。

そして華雄は出てきた。

俺は、あんな事を言われたら誰だつて出でぐるよ、と心の中で華雄を庇護していた。

それに続いて張遼が出てきて、「華雄、戻れやあ」と叫び、呼び戻そうとしていたが、牙連は上手い具合に華雄を引き寄せて袁術軍と戦わせていた。

そんな時に「呂布だ、呂布が出た」まるで怪物が出たよつて兵士が叫んでいた。

兵士が、どんどん吹き飛んでゆく、そして段々とこつこつ近づいて来ているようだつた。

マジかあと思ひながら、覚悟を決めて向かう事にした。

呂布は、べらぼうに強い牙連並か、それ以上だ。俺は数合を打ち合ひ吹つ飛ばされた。

吹つ飛ばされて倒れてる所に呂布が来てヤバイと思つてはいるが絶妙なタイミングで、血だらけの牙連が、現れた。

おいおい大丈夫かよと思つて、よく見ると傷は無く、おびただしい返り血だつた。

一安心して、主役は遅れてやつて来るものなんだなあと、その時の俺は呑気に思つていた。

呂布は「お前、強い」と牙連に言い一人は激突した。

暴風雨もしくは雷のような激しい闘いをしていく。攻めあわせながらも一步も譲らず戦つてゐるよつに見えた。

そんな中、華雄は重傷を負け敗走し、張遼は曹操に捕まつた。

陳宮が叫び、わめき立ててゐると、呂布は一寸距離を取つた。呂布は傷を負つてゐたが、牙連は無傷だつた。

陳宮に何か言われて呂布は頷いて「勝負、預ける」と牙連に言い放ち、陳宮が何か投げると辺りは煙幕に包まれて、煙幕が晴れると呂布と陳宮の二人は消えていた。

牙連に声を掛けよとしたが、いつもと雰囲気が違う事に俺はよつやく気付き、声を掛けのを躊躇つてゐると、静かに歩き出し近くにいる敵兵を片つ端から切り捨て始めた。容赦無く皆殺しにするよつな勢いで進み、武器を捨てた兵士にまで刃を向けた。

ガキンッ。

俺は何とか刀で受け止め。

「何やつてんだ、牙連」

そう言つてから牙連の顔を見ると、眼は血走つて荒い息をあげていた。

牙連は、いつも通りの口調で、「誠、どいて。敵を殺さないとそれに邪魔するなら切るよ」

そう言つて薄く笑つた。

「正氣に戻れ、この馬鹿が」

「一度は言わないよ」

そう言つて牙連は切り掛けた。

無茶な事を言つてくれるなあどうしようつて言つんだよ。

おかしくなつた牙連と切り合つていたが、本当に容赦が無い本氣で殺しにきてる。マジで無理だ、ヤバイ、そう思つた時には刀をかち上げられて胸を切られていた。

胸が焼けるように熱い、血がわんさか出ている。ギリギリまだ生きていた。

俺は言葉を振り絞り

「しつかり、しろ。そんな事じゃあ、雪蓮を守れねえぞ」

そつ言つて、意識がとんだ。

次に気がついたのは、天幕の中だつた。意外と死なないもんだなあと思つていると、横に公瑾が椅子に座つて本を読んでいた。
「気がついたか、死んだかと思つたぞ」そつ言つて読んでいた本を机に置いた。

「おひ、生きてたわ。所で牙連はどうしたよ」

「お前を連れて来て、いつの間にか消えていた」

「誰に切られたか知つてるか

公瑾は無言で頷いた。

「牙連が、ああなる事は知つてたのか

公瑾は首を振りながら

「いや知らなかつた。雪蓮も知らなかつたようだ」

まあ、そつだらうつなあ。

「雪蓮も血を見たり戦をすると似たようになるが…、あそこまでは変わらない。今、雪蓮が牙連を探しに行つている」

それから俺達は、黙り込んだ。

しばらくして、雪蓮と牙連が一緒に入ってきた。
牙連は、一人切りにして欲しいと雪蓮と公瑾に言い、一人は出て行つた。

「めん

「別に気にしてねえよ

「でも…、ぐつ

まだ何か言おうとしたので、寝台から出て、とりあえず牙連をぶん殴つてみた。牙連は倒れずに持ちこたえた。

怪我人には辛いな

「面倒臭え、俺が良いと言つてんだ。それに止めてやる約束だつただろ、俺は俺がやりたいようにやつただけだ。それに生きてる 最後は笑つて言つた。

牙連はポカンとした顔をしていたが、「わかつたよ」苦笑いして頷

いた。

寝台に戻り、少し世間話をして牙連は帰つていった。

一日にたつて傷の熱は大部分が引いたが、痛みは大分ある。公瑾と牙連には心配されたが、大丈夫だからと説得して行軍した。

洛陽に入つてみると、そこには平和で綺麗な町並みが広がっていた。まあ、袁昭が言つた事を信じていた訳では無いが、こうも真逆だと皆に袋だたきにされた董卓に同情してしまう。

その董卓は、洛陽に一番乗りした劉備軍に殺された。そして近くには何故かメイドが居た。

その劉備軍メンバーと牙連は何故か仲良くなつていた。いつの間にと思いながら俺も一刀と話しをしていた。

色々と、あつという間に進む。

なんやかんやと袁昭がやつて、獻帝が即位した。

そんなこんなで俺達は丹楊に、戻る事にした。

袁術は劉備が気に入らないようで戦を仕掛けるらしい、雪蓮は要請されたが賊の討伐に忙しいと言つて断つた。

実際に賊を片付けている最中だし忙しいと言えば忙しいんだ。

この丹楊にいる孫家の主立つた武将や軍師は、祭さん、思春、穏、亞莎、明命、蓮華、で俺に牙連、公瑾と雪蓮だ。

のちに気付くが韓当がいるのを忘れていた。

袁術と戦うのに一番のネックは実質人質の孫尚香だ。この末っ子の所在を今は全力で探している所だが、なかなか見つからない、張勲も領内に上手く隠したもんだ。

そして後は、無駄に多い兵数と大將軍の張勲くらいに、気を付けていれば大丈夫だろう。

とうとう袁術は劉備に、いちゃもんを付けて、戦が始まった。

劉備軍は潰れた勢力を吸収してどんどん強くなっている、袁術を倒すかもしれないな、そしたら助かると駄目人間的に考えていたが、ただ劉備軍は兵数が少ないからな、武将や軍師が多いのに、もつたいないな。

牙連は劉備軍と文通して連絡を取り合っているようだ。

暫くして袁術は大勢の部下を失い惨敗して逃げ帰ってきた。それから袁術は皇帝を自称してくれたので逆賊として討伐が出来るようになつた。馬鹿は本当に助かる、しみじみと思った。

そんな中、曹操は袁昭を攻撃して袁昭軍を壊滅状態にしたが、袁昭は配下と共に劉備の領地に落ち延びたらしい。

軍師の公瑾達は人民に「袁術は暴政し戦ばかりしている」「ハチミツ水の為に重税している」「歌を聞き眠つたら死刑」など色々な噂を流していた。

ようやく末っ子の居場所が一力所にまで絞られた、一力所目を明命が、一力所目を思春が行く事になった。

日暮れとともに明命と思春は出発した。

庭に出て夜の空氣に漫つて酒を飲んでいたら、
「あまり酒を飲み過ぎるなよ」聞き慣れた声がして、ゆっくり振り返つて見ると公瑾が灯を持って立つていた。

「雪蓮の所に行かなくて、良いのか」俺が尋ねると。

「もつ行つてきた。牙連とやりあつていたので……」

俺は、酒を吹き出して咳き込みむせた、少し酒が鼻に入った。「ガハツ、ゲホツ、そうか、やつたか、戦前によくやるねあ

公瑾は呆れた目をしながら
「お前が何を考えたか知らないが、雪蓮と牙連は鍛練をしていただけだ。」

そりやそうだよなあと想い。

「じゃあ此処から真面目な話し今月まだ一回も診療してないだろ、
診みさせてくれ

「お前の傷が治つてからで良いそしたら診療してくれ。それに私の
体調は良好だ」

この世界には当たり前だが高度な医療機具が無い。軽い風邪で人は

簡単に死んでゆく、医療機具の替わりと言う訳では無いが「氣」がある。外傷は見ればいいが、病気など見えないモノは体内に「氣」を流して調べる。

「氣」の扱いは想像以上に難しい、それが医療用となると一段と難しくなる。

大怪我をして、いつもより俺の「氣」は弱くなっていた。

「氣」は人並みより多いが所詮その程度で、扱い方も上手い訳では無い。

それに「氣」は生命力みたいなモノだから無茶をすれば自分が死ぬ事になる。

息を吐いて公瑾の言葉を信じる事にした。

俺は、この時に無理にでも診療するべきだった、と、後悔する事になる。

そして孫尚香の救出部隊が出発した翌日には、袁術に対して人民の反乱が起じた。

「すまない、民を煽り過ぎたようだ」

公瑾が雪蓮に謝っていたが、微調整が出来たら逆に凄い。

「袁術に不満が多過ぎただけでしょ。それに絶好の機会だわ、一気に袁術を滅ぼすわよ」

「そんな、小蓮は、どうするのですか」と蓮華が叫んだ。

「こんな好機が今度また来るか分からない。妹の為だけに独立を見逃す訳には、いかないの」それにシャオは大丈夫よ、勘だけどねと雪蓮は言った。

ちなみに雪蓮の「勘」は、もはや神がかっている。凄いとしか言いようがない。

袁術の支援要請があり、反乱地域に行き、人民達には協力する事を一足先に伝え何事もなく合流が出来た。そして袁術の城に向かい孫吳の独立戦争が始まった。

最初は粘っていたが、孫尚香が救出された事を知ると孫策軍は勢いをました。

しばらくして城門が開いた。

袁術と張勲を探していたが、なかなか見つからず片つ端から扉を開けていた。

そんな時にオッサンが現れて、「我が名は紀靈、袁術様配下の武將なり。太史慈殿とおみうけいたす。一騎打ちを願いたい」出来るねえ、そん事を思い。

「良いぜ」俺は了承した。

このオッサンは、なかなか強い数十合を切り合に戦っていた。

そんな時に、多分不可抗力だと思つが傷口を殴られて、俺は顔には出さず悶絶した。

これは傷口が開いたかもなあと思つているとオッサンに「どうした、動きが鈍っているぞ」そう言われたが、余り余裕が無かつた。

一気に決めなきゃヤバいな、そしてオッサンに「次で終わらせる」そう言って距離をとつた。

全力で集中して一撃必殺の技を放つた。

オッサンは「見事」と言い地面に倒れた。まったく熱いオッサンだつたなあと思つていたら、意識が、とんだ。

僕が雪蓮と一緒に袁術と張勲を探していた。僕達は真っ直ぐに進んで突き当たりの部屋まで行き扉を開けると、そこには袁術と張勲、そして何故か一刀と趙雲が居た。

雪蓮は笑顔で進みながら、

「さて、そろそろ年貢の納め時よ、死になさい」

そう言つて刃を振つたが、趙雲が受け止めた。

「何故、邪魔をするのかしら。どかないと殺すわよ」

そう雪蓮が言つと一刀が前に出てきて土下座をした。

「頼む俺には、やりたい事がある孫家にも必ず恩返しが出来るだから袁術を殺さないでくれ」

頼むと土下座しながら言つた。

雪蓮は少し考えてから、

「いいわよ、わざと行きなさい」 そう言つた。

一刀は「ありがとう」と何回も言つて、最後に暗殺に気をつけのうつに言い、出て行つた。

「殺すかと思つたよ」

僕が、そう言つと雪蓮は随分とまともな事を言つた。

「劉備には貸しが出来るし、その方が良いと思つたのよ」

勘だけどね、牙連もでしょ、と言つて確かに僕も、そう思つていたので頷いた。

それから、シャオと思春がやってきて、久々の再開と孫昌独立に二姉妹は喜んでいた。

一日たつて事後処理も済み、宴会をする事になり、飲めや歌えの大騒ぎをして楽しんでいた。

「牙連、飲んでる。いっぱい飲みなさい」雪蓮はそう言い、酒瓶を僕の口に無理矢理に押し付けて酒を流し込んだ。

「牙連、あんた女に興味があるの。誰にも手を出していくないでしょ、好きな女が居るとは聞いてるけど、それとも本当に男色なの、牙連は孫家の血を途絶えさす氣」どうなのよ、従姉妹として心配なのよ、そう聞いてきた。

どうやら僕を酔わせて好きな人を聞きたいらしい、人の気も知らないでと思いながらも雪蓮に酒を勧め、うやむやにした。

夜も遅くなり、ベロベロに酔った雪蓮を抱いで部屋に向かい、寝台に下ろした。

僕も大分、酔っ払っていたんだと思う。

「雪蓮、起きてる。僕の好きな人、教えてあげようか」そう言つと飛び起きて眼を煌めかせ、うんうん頷いている。

僕は少し長い溜め息を吐いて、「雪蓮だよ、僕は雪蓮が大好きなんだ、愛してる。雪蓮が僕の事を弟ぐらにしか見てないのは知ってる。でもね僕は一度も雪蓮を従姉妹や姉だと思った事は無いよ、ずっと

「人の女として見ていたんだ」「一気に言いきつた。

雪蓮は「へつ」と間抜けな声を上げて戸惑つた顔をしていた。

僕は少し強引に口づけして寝台に押し倒した、唇を離すと雪蓮は呆然としていた。

「本氣だから、とりあえず今日は、これだけにしつくよ」

そう言い雪蓮の部屋を出た。

（誠）

俺つて戦の度に、意識を失つている気がする。もしかして俺は弱いのか自分では強いと思つていだが、そんな事を考へていると公瑾が部屋に入ってきた。

「また意識を失つたらしいな」

人が氣にしている事を的確に突いてきた。

「つるせえなあ」俺は、そんな返答しか言えなかつた。

「ふつ、生命力はしづぶといな」

くそつたれが、いつか弱みを握つて復讐してやるからな、そんな事

を考えながら真面目に俺は話しだした。

「当分、診療が出来そうにないから他の医者に診てもらひてくれないか」

「ああ、わかつたよ」

そい言って公瑾は頷いた。

少し世間話をしてから、公瑾は部屋を出て行った。

そして俺は寝る事にした。

暗殺暗夜（前書き）

願わくは 花の下に 春死なん その如月の 望月のいろ

西行

山家集

一夜が明けて、俺はのんびりと寝台で「ゴロゴロしていた。

そんな時に牙連はやつてきて、開口一番に聞いてきた。

「雪蓮、此処に来た。朝から探ししているけど、いないんだ」
そして、嫌な予感がする、そう牙連は言った。

俺は首を振り、来て無い事をつげて素早く着替え、牙連と共に公瑾に聞きに行く事にした。

「雪蓮なら孫堅様の所に行つたのだろう

一人で出歩くなと言つているんだがな困つたものだ。

その言葉を聞いて俺達二人は孫堅の墓に向かった。

杞憂で、あれば良いが牙連の勘も抜群に当たるからな、今日ばかりはハズレて欲しいね。

墓の前には雪蓮が座っていた。

蹄の音に気がついたのか、立ち上がり振り返った。こちらを見てビクッとして、少し気まずい顔をして頭を搔いていた。

なんかあつたな、そんな事を思つていると牙連が突然叫んだ。

「雪蓮、後ろだ」

雪蓮が振り返ると既に矢が放たれていて、一本は防いだが、一本が右腕に刺さった。

俺も牙連の言葉で、よつやく気がついて雪蓮に駆け寄った。

牙連は雪蓮を抱いて名前を呼んでいた。毒矢のようで刺さった場所は既に変色していた。

「落ち着け、俺が診る。お前は刺客を始末しろ、解毒剤があるかもしない」

「わかった」

そう言って頷いた。

「毒矢みたい」息苦しそうに雪蓮は言った。確かに、しかも即効性の毒薬だな、マズイ。

「私が死んだら、跡は蓮華に継がせて、あの子なら私より、良い王になれる」

額に大粒の汗をかいて、そう言った。

「わかった、だが死なせねえよ」そう言つて雪蓮は苦しい笑顔で頷いた。

牙連は直ぐに刺客を始末して、戻ってきた。

「無かつた、雪蓮は」

「厳しい状態だ。だから此処で手術する」

「手伝える事は、ある」

「集中するから周辺の警戒を頼む、雪蓮の事は任せろ。」

それから数時間後。

牙連は丹楊に戻り、牛車を引いてきた。そこには誰もいなかつた、まだ言つてないのだろう。

雪蓮を牛車に乗せて俺達は無言で丹楊に帰つた。

誰にも会つ事なく、雪蓮を部屋に運び込んだ。それから牙連は主立つた武将と軍師を集めるように兵に言つていた。

「皆には俺が話す。牙連は雪蓮の側に居てやれ、俺には得にて、もうすることがない」

「わかつた、頼んだよ」

部屋に行くと既に全員が揃つていた。

「それで、とても大事な話しがあると言われて來たが一体なんだ」と公瑾が聞いてきた。

「ああ、それじゃあ、話すから最後まで、聞いてくれ」

そう言い俺は、牙連が部屋に来た時から話し出した。刺客に襲われ毒矢のくだりなると流石に蓮華とシャオが声を上げて雪蓮の所に行こうとしたが、公瑾が一喝して止めた。一息して、また話し始めた。いが雪蓮は絶対安静だ、それと意識は無いぞ」

「それで今は雪蓮の体力しだいだ、側には牙連が居る。会つても良いが雪蓮は絶対安静だ、それと意識は無いぞ」

俺が言い終わると蓮華とシャオが飛び出して行き、それに続き公瑾以外は出て行つた。

「お前は、どう思つてこる。雪蓮は助かるか

「なんとも言えない、見た事も無い毒だつた。運を天に任せるとしか
ない」

「やうひか

そう呟いて公瑾も出て行つた。

三日後。

雪蓮は、よつやく意識を回復した。最初は、お粥を食べていたが直ぐ、もつと食べたいと言い出して普通の食事を出した。

「う～ん、久しぶりに寝台から出ると気持ち悪いわね」「ちいさに少しふらついていた。

「片腕が無いと、感覚が狂うわね」呑気に、そつそつと。

雪蓮は右腕を無くした。

俺の判断で腕を切る事にした。

その時の俺は、難しい表情をしていたのだろう。

「命あつての物種よ」「そつ言い笑ってくれた。

数週間後、雪蓮は皆を集めた。

「皆も知つての通り、私は右腕が無くなつた。それで調度いい機会だと思うから蓮華に王の座を譲ろうと思つ」

公瑾は何も言わなかつた。

ただ蓮華が

「なつ、何故、私なのですか。それに王なら牙連の方が良いと私は思います」

雪蓮は静かに話し出した。

「私は戦事は得意よ、でもね、蓮華は、この江東を私より上手に守る事が出来るはずよ。それと牙連には確かに王の器はあるけれど向いて無いわ」

蓮華は躊躇いがちに、

「少し考えさせてください」

そう言った。

その日の夜、庭で公瑾が酒を飲んでいた。

「やけ酒かあ

「ああ、やけ酒だ」

俺は頭を搔いて

「雪蓮が王を譲ったからか

そう聞いてみた。

「この間からずっと雪蓮に説得されていたからな、納得はしてないが、理解はしているつもりだ。ただ、やはりな…」

「そうか

俺が、そう言ってから、しばらくは無言が続いた。

そんな時に公瑾は咳き込み、血を吐いた。

「公瑾、お前、なんで言わなかつた

「お前が怪我する前から調子が悪くてな医者に診せに行つたら不治の病だと言われた。色々な医者に診せたが同じ事を言われたよ」

「なに諦めてる馬鹿野郎が。来い俺が治してやる
俺は公瑾の手を引いて部屋に向かつた。

部屋に着いて公瑾を椅子に座らせ診てみると、心臓か、なかなか手
強そうだな。

「治療する、じつとしてろよ
「みび

そう言って「氣」を流し始めたがちつとも変化しない、クソが、氣
合を入れて、もつと流し込んだ徐々にだが消えている。

それから数十時間後、病魔が完全に消えたのを確認して俺は、ぶつ
倒れた。

あれから丸一日が過ぎていると聞いて驚いた。外は真っ暗で、椅子
に座った公瑾が居たので最初は数時間後かと思つた。

「いきなり倒れて、心配したぞ」

「ああ、俺も倒れるとは思わなかつたさ」

公瑾は、所でと切り出して

「真名を交換しないか、機会が無くて、まだだつたろ
少し緊張氣味に公瑾が言つたので、俺は笑いそうになつた。

「誠だ」

そう言つた

公瑾は微笑みながら

「冥琳だ」

そう言つた。

俺は「氣」を使い過ぎたのか、体が上手く動かなかつた。

その後、私が原因たがると冥琳にかいがいしく世話になつた。

赤壁之戰（前書き）

本当に適切です。

赤壁之戦

数日後、俺の体は完璧に動くようになった。

雪蓮も大分、片腕にも慣れて、楽しそうに戦っていた。

そんな時に劉備はやつてきた。

曹操軍の戦術戦略と兵の数量に押されて劉備たちは孫堅に逃げてきた。

大体は史実通りなつていたが、武将が一杯いた、袁昭、文醜、顏良、袁術、張勲、呂布、陳宮、等など、いっぱいいた。

曹操から文が来て、劉備たちを引き渡せ、そつしなければ戦争だ。とそんな感じの事が書いてあつた。

ちなみに何故か俺にも文が来た、良かつたら私の所に来ない好待遇で向かえるわ、とそんな事が書いてあつた。

両方とも文の返事は、しなかつた。

そんなこんなで曹操軍は赤壁に集まってきた。

曹操水陸軍およそ八十万、こつちは三万だ。

いやあ半端ないなあ、直に田にすると壮观だねえ、笑える。

夜になり、俺は有る事を考えていた。そんな時に庭から綺麗な音が聞こえてきた。そこには冥琳が楽器を奏でていた、俺は曲が終わる

まで聞きいっていた。

「つまいなあ流石は美周郎だ」

「誠か、一応私は女だぞ、何故、郎なんだ」

「悪い悪い、じゃあ美周姫で」

「姫と言つがらでも無いがな」

「文句が多いな、十分に姫だと思うがな、俺はよ。なあ他にも聞かせてくれよ」

俺が、そう言つと演奏を始めてくれた。冥琳の奏でる音を聞きながら夜は更けていき。

そして俺は、有る事を話した。

そして朝になり軍議の時間だ、武将や軍師が無駄に多いなあと思つていた。

色々な意見が出て軍議は大分、荒れていた。

そんな中、冥琳が机を叩き注目を集め、話し出した

「攻めるのは得策では無い、相手は水上戦には慣れてはいないので、少しづつ戦力を削り、守りながら戦う」

冥琳の意見が決まりそうになる中で俺は声を上げた。

「逃げ腰だな、水上戦に慣れてないなら一気に攻めれば良いだろ？
そんな腑抜けで軍師が出来るのか。守りながら戦うなんて、チャン
チヤラ可笑しいね」

いち早く蓮華が反応した。

「自分が何を言つてるか、わかつてゐるのか、誠。今すぐに謝れば特
別に許そう」

まったく蓮華は甘いなあと思ひながら俺は、

「嫌だね、撤回する気は無い」

そつとつとつた。

蓮華は信じられない顔して俺を見ていた。

冥琳は淡々と言葉を口にした。「軍法にのつると打ち首だな」

それから蓮華や冥琳が話し合い俺の刑罰は鞭打ちになつた。

背中で、寝返り出来ねえ、とりあえず痛い。最初は冥琳がやる
と思つてたが祭さんに頼んだようだ容赦が無いから、もう意識が
遠退きやばかつた。

鞭打ちは、もう一度ゴメンだそう心に固く誓つた。

数日後、大分、痛みが引いた。夜を待ち自分の部下と共に孫吳から
逃げ出した。明命と祭さんが追つてきたが何とか振り切り、曹操の
所にたどり着いた。

「腑抜け逃げ腰な孫吳には、ほとほと愛想が尽きた、そして俺に、この仕打ちだ」

そう言つて背中か見せてから、続けて俺は言った。

「あんたは俺を高く評価してくれる。ただ一つだけ願いがある孫吳の奴を俺の好きにさせてくれ、良いか」

とりあえずは信じてくれたようだ一安心だ、疲れるねえ。

一日後、風が強く吹き出した。

いい風だ。

闇に紛れて曹操の水軍船に油や火薬を仕込み、鎖を繋いだ。部下達も仕込み終えて全員が戻ってきた、そして俺達は火を放ち。炎は瞬く間に燃え上がり、次々と船を燃やしていった。

いやあ明るいねえ、船の縁に立ち呑気に思つていると、ヒュウッと音がして矢が刺さっていた。俺は水面に派手な音をたてて、落ちた。

（牙連）

船が、風に煽られて凄い勢いで燃えている。

誠が逃げてから、孫吳の僕達はとても動搖した。そんな僕達を見かねて冥琳は話してくれた。全て最初から演技で曹操を罷にはめる為に仕組んだ事だと。

誠が裏切るはず無いのに、恥ずかしいな、帰つて来たら謝らないと、
そんな事を思いながら船を出して出陣した。

誠の部下が乗つてゐる船が見えた少し様子がおかしい、それに肝心の誠の姿が見当たらない。大声で聞いてみたら、落ちたらしい。誠なら大丈夫だろうと思い心配はしなかつた。それより曹操を追撃して息の根を止めないとね。

僕は雪蓮に近づいて、

「無理しないでね
耳元で、ささやいた。

「牙連、そんな近くで言わなくて聞こえるわ、それに無理しないわよ」

少し顔を赤くして耳を抑えながら言つた。

「雪蓮は、可愛いね

「あ～、はいはい、ありがと」雪蓮はヤケクソ氣味に、返事をした。

れて氣を引き締めるか。

それ程、僕は強くない。自分では文官向きだと思つが何故か武官をしている。

最前線で戦つてると何度も死にそうになるが、いつも祭殿が助けてくれた。

そして僕は直ぐに祭殿に惚れてしまった。

今日の戦も、いつもと同じように大変で厳しいが、祭殿に迷惑をかけない。そして一息入れてから祭殿を探したが見当たらず、少し遠くで戦っているのが見えた。

僕は急いで駆け付けて加勢し、なんとか敵を葬つて祭殿に声を掛けようとした。

その時、祭殿に矢が刺さり、ゆっくりと落ちてゆき、僕は直ぐに飛び込んだ。

川辺まで、なんとか祭殿を引きずり上げた。

「祭殿、祭殿、しつかりしてくださいー」

「大丈夫じゃ、そんなに傷は深く無い平氣じや、すまんの今日は助かつたぞ」

その時の僕は、おかしくなっていた。

「祭殿、結婚してくださいー」

「なつ、何を言つておるんじや韓当、頭でも打つたのじやろ

「いえ正氣です。ずっと前から祭殿が好きでした」確かに正氣では無かつた、でも愛していし守りたかった。

「いや、だが」

祭殿が躊躇つていると、川の方から声が聞こえてきた。

「お前ら何、青春してんだよ。戦が終わってから、やれや」

そこには肩に矢が刺さった誠殿がいた。

（誠）

必死で川辺まで泳いで、たどり着いてみると、祭さんと韓当が青春していた。

俺が少し忠告をすると祭さんは拳を振り上げて、その拳は真っ直ぐに顎を直撃して俺の意識はとんだ。

田を覚ますと眞琳が林檎を剥いていて、二つを見た。

「また意識を失ったな。あまり心配をかけるなよ」

「今回は複雑な事情があつたんだよ、まあ悪いな。それで後どうなつたんだ」

「あれから牙連と雪蓮が曹操を追撃したが逃げられた、劉備軍が夏侯淵を生け捕りにした。

私達の勝利だ」

「それと天の使いが、とても馬鹿な事を提案してきた」

冥琳は笑つて話し始めた。

二国協定（前書き）

比翼連理。

面倒で、無理でした。

ううん、いい日だ。赤壁から一週間後、劉備、曹操、孫權、三国の王、全員が揃つた。

天の御使い、一刀が三国で協定を結ぼうと言つてきた。

孫權こと蓮華は、その提案を心よく飲んだ。

劉備は、元々天下には興味は無く、皆で平和に楽しく暮らせれば良いらしい。

曹操には、夏侯淵を引き渡すから、とりあえず来て欲しいと言つたら了承してくれた。

そして二国の王の話し合いが始まった。

で面倒臭いから省くが、一刀がかくかくしかじか、と頑張つて三国協定が成立した。

それから一月後に牙連と雪蓮は一人で諸国放浪しに行つた。色々と破天荒な事をして噂になつてゐる。

それと韓当と祭さんは、くつついた。呆れる程にラブ・ラブであまあまだ。

そして俺は、庭で冥琳が奏でる音を聞きながら、のんびりしていた。

曲が終わって。

「お前が、一力所に留まるような男だと思わ無かつたな」

「そうだな、まあ惚れた女がいるからな」

「ほひ、一体それは誰なんだ」

「言わなくとも、わかるだろ」

「これだから男は駄目なんだ、やる事だけやって、肝心な事を言わない」

嘆息して頭を搔き、

「冥琳、愛してる。」

俺が、そう言ひつと。

「まつたく雰囲気も、あつたものじゃないな」

まだ何か言いそつたので、面倒臭くなり俺は冥琳の口を啄んで黙らせた。

（牙連）

あれから五年がたつた。

雪蓮と僕は、孫吳に戻る事にした。皆に久しぶりに会えると思つて

嬉しくなる、

それにやつとノンビリゆつくりお茶を飲みながら本が読める。

そして僕達は孫^{まご}に着いた。

「久しぶり、誠、元気だつた。所で、その子達は誠の子供」「ああ、やうだぞ。長男の惇と長女の循で、眞琳の腹の中に、もう一人いる」

「そりなんだ。子沢山だね、後ね僕達も子供が出来たんだ」「僕は、そり言^い雪蓮の肩を抱いた。

「めでたいな。祭さんも最近、子供が生まれたんだ」

それから無事に僕と雪蓮、誠と眞琳の子供達は生まれた。

そして昔の事や今までの事を、四人で話し合^い笑^ういあつて、穏やかに暮らした。

おわり。

設定と説び

初期設定

太史慈子義
たいじじしき

誠せい真名

座右の銘
乾坤一擲

性格、武器

戦闘狂 & 戦好き、蛇腹刀

後付け設定

いつの間にか医者に、そして牙連に負ける事に、よく氣絶する人になつた。

二つ名

江東の黒蛇

牙連 真名
がれん

孫瑜仲異
そんゆちゆうい

性格

のんびり&ゆつたり、天然

急け者

後付け設定

いつの間にか最強になり、主人公みたいになつた人。

二つ名

江東の赤獅子

韓当

かんとう

真名

なし

性格

真面目な変態

詫び

勢いとノリで書き、竜頭蛇尾になつて申し訳ない。
でも修正はしない。

短編を書きたい。

正月婚約

もうすぐ正月だ。

俺は「コタツが欲しくなり自分で作る事にした。

テーブルの足を短くし、真ん中をぶち抜き、そこに火鉢を入れて、蜜柑を上に置き猫を入れ、「コタツの出来上がりだ。

俺は冥琳を呼んだ。

「誠…。なんだ、これは」

胡散臭いと言わんばかりの表情で冥琳は聞いてきた。

「いいから、入ってみろよ」

しぶしぶと冥琳は入ったが、すぐにコタツの虜になった。

そして日が暮れて、夜も更けたので冥琳に声を掛けた。

「もう遅い、帰つたらどうだ」

まだ、出たく、ない、

「背中が、寒い、あたためる」

顔をふせながら、ぼそぼそと、だんだんと小さく喋った。

俺は笑いながら冥琳を後ろから包むように抱きしめて、肩に首を乗せて聞いてみた。

「あつたかいか」

「ああ、あつたかい」

少ししてから、もつと強く抱きしめる、といつた。されど、あまりにも可愛すぎて、俺は暴走した。

蜜柑は落ち、猫は逃げ出した。

「お前は何回やれば気がすむんだ。腰が痛くてしょりがない」
冥琳はマジで怒りながら、そう言つた。

「冥琳が誘うからよ」

「私は、誘つてない」

ふんつ、そう言い腰を押さえて部屋から出て行つた。

「どうとかしないと、マズイな。

そして大晦日かの夜に冥琳を、近くにある一番大きい楼閣に呼び出した。

「こんな場所に呼び出して、なんの用だ」

冥琳は、まだ怒っている様子で無愛想にツンツンした風に言つた。

「まあ、入れよ」

俺は自分が被つている毛布を広げて入るよつに促したが、入るつとしないので強引に入れた。

「寒くないか」

「寒くはない」

「！」の前は悪かつたな、冥琳が可憐すぎて暴走した。すまん

少しして、もう怒つてない、

「それにしても誠が、そんな事を言つとは驚きだ」
そう言つて、やつと笑つてくれた。

「こんな、いい女を手放したくないからな」

「私も、こんないい男を手放したくはない」
そつ言つてから首を捻り、軽く口づけをしてきた。

自重しなければ、一の舞だ、落ち着け、俺。

それからは些細な事を話しながら、夜が明けよつとしていた。

「冥琳、もうすぐ夜明けだぞ。起きてるか

「ああ、起きてる」

日の出があがつた。

そして俺は、

「俺は冥琳が居ないと駄目だ、ずっと一緒に生きていきたい。『冥

琳、愛してる』結婚してくれないか」

途中から自分で何言つてるか、わからなくなつた。

「はい」

少し呆然としていたが、そう答えてくれた。

その日は、冥琳と一緒にノンビリす「」した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1681ba/>

孫吳ルート

2012年1月14日16時55分発行